

連載  
142

## 小松方言の世代差 その1

「ケンケン何回できる〜?」「よ〜し、競争しよっさ!!」  
(安宅学童クラブにて)

明けておめでとつございます。今年も引き続きご愛読ください。

原稿を書いている今は12月初め。言葉に関して言えば、毎年恒例の現代用語の基礎知識選「ユーキャン新語・流行語大賞」が話題になる時期です。2009年は「政権交代」が大賞を取りましたし、年も改まりますので、本連載も今回から新たなテーマと交代することにします。

新しいテーマは「小松方言の世代差」です。

これまでも様々なテーマとの関連で小松方言の変化(高年齢で使われている方言が若い世代で衰退している例)に言及したことがあります。江戸期の強固な幕藩体制下で全国各地に花開き、長く地域で受け継がれてきた伝統的方言は、テレビに代表されるマスメディアの影響や、最近のネット社会に象徴される情報化時代の中で衰退が進んでいます。全国的に見ても北陸地方の伝統的方言の衰退が目立ちます。

そこで今回は三つの方言調査テーマを参考に、小松市内での方言の世代差(世代的变化)の状況を見ていきたいと思います。三つのテーマとは、一つ目が平成10年に田中鉄哉氏(当時金沢大学教育学部4年生)がJR金沢駅から大聖寺駅までの12の駅周辺集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、八日市町、島町)での調査結果、二つ目が平成11年に小川有美氏(当時金沢学院大学文学部4年生)が旧市内の龍助町・東町の70歳代から

10歳代の189名に行ったアンケート調査の結果、そして三つ目が筆者が金沢大学学生の協力を得て昨年(平成20年)JR倶利伽羅駅から大聖寺駅までの17の駅周辺集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での調査結果です。

## 遊び言葉の世代差から

今回は残りの字数も限られていますので、まず田中氏のデータをもとに遊び言葉の世代差を少しだけ見ておきます。

「片足跳び」の方言では、長田町の70歳代にシントンコというのが聞かれた以外は全ての世代でケンケンが使われていて、共通語形カタアシトビはまだほとんど使われていませんでした。「お手玉」の方言では、50歳代以上でオジャミ(30歳代の一部)が聞かれたものの、30歳代以下では共通語形のおテタマに変化していることがわかりました。

では次回以降も世代差について続けます。

連載  
143

## 小松方言の世代差 その2



「よ〜し、じいちゃんがサルコボンボしてやるぞ」「え〜!? カタグルマじゃないの?」(本折町の中谷武志さんと孫の武寛くん)

## 遊び言葉の世代差(続)

前回に続いて今回からいよいよ本格的に小松方言の世代差について見ていくことにします。今回は田中鉄哉氏の平成10年の調査(長田町、八日市町、島町)の4世代調査と、筆者たちの一昨年、平成20年の調査(長田町、本折町、符津町)の4世代調査の結果から、「肩車」の方言の世

代差を見ることにします。

## 「肩車」方言の世代差

小松市内の高年齢における「肩車」方言の分布については、すでに本連載の2回目と43回目でもご紹介しましたが、今回は長田町、八日市町、本折町、島町、符津町に絞って、あらためてその世代差とともに見ることにします。

全国の他の地域に比べて、北陸地方にはなぜか「肩車」方言の種類(バリエーション)の多いことが、国立国語研究所編『日本語地図』や筆者自身のこれまでの北陸地方での分布調査などから明らかになっていきます。その種類の多さは、連載43回目(2001年10月)でも紹介したように、当時までに調査を終えていた小松市内約110地点で74種類もの方言形が聞かれたことからわかるでしょう。ただ、その多彩だった「肩車」の方言形も確実に共通語形カタグルマに取って変わられようとしているのです。

田中氏の調査結果によれば、長田町と八日市町では、70歳代(現在であれば80歳

代)でチンマンダが聞かれ、50歳代以下ではカタグルマが多くなり(30歳代で長田町にチンマンダ、八日市町でサルコボンボが少し聞かれています)、10歳代ではカタグルマだけになっています。島町も似た状況で、50歳代以上でハツンマが聞かれたものの、30歳代以下ではカタグルマだけとなっています。

一方、その10年後である一昨年、筆者たちが行った長田町、本折町、符津町での4世代調査では、長田町の70歳代でチンマンダ、本折町の70歳代でサルコボンボが聞かれた以外は、カタグルマの回答のみでした。やはり、この10年間で確実に共通語形カタグルマが浸透していることがわかりました。

「肩車」と言えば、遊び言葉の中でも、前回取り上げた「片足跳び」や「お手玉」と違って大人が介在する遊びであることと、「片足跳び」に比べると、「お手玉」と同様に共通語形の情報が比較的多いことが、共通語化が進んでいる理由と言えるでしょう。

連載  
144

### 小松方言の世代差 その3



カルタ型の四角いメンコ。「カッタ」という言い方は、カルタからの変化形と考えられます。

今回は遊び言葉の世代差から「面子」方言について見てみたいと思います。タータは筆者たちの一昨年(平成20年)の長田町、本折町、符津町での4世代調査によるものです。

#### 「面子」方言の世代差

小松市内の「面子」方言については、これまでにも連載18回目(1999年9月

号)と連載90回目(2005年9月号)で高年齢方言の分布をご紹介したことがありますので参照していただければと思います。

ボール紙製の紙面子が流行したのは明治後期からと言われますが、今のようゲームなどなかった時代、つまり筆者も含めて50歳以上の人(特に男性)には懐かしい子どものころの代表的な遊びの一つだったと思います。

まず長田町では50歳代以上でカッタが使われているのに対して30歳代以下では共通語形と同じメンコでした。本折町では60歳代以上がマルチで30歳代以下がメンコ、また、符津町では60歳代がパス、50歳代がパーで20歳代以下がメンコでした。長田町のカッタは「カルタ」からの変化形と考えています。「面子」という丸い形が普通ですが、昔は四角いカルタ型の紙面子もあったようですから、その名残の呼び方かもしれません。カッタの類は市北部や大杉谷川上流域、加賀市に近い日末・佐美などにも分布します。本折町のマルチは「マルウチ(丸打ち)」の変化形

でしょう。マルウチ、マルチは郷谷川流域の尾小屋から金野までと、大杉谷川・梯川流域、そして本折町など旧小松町域に分布が見られます。符津町のパス、パーは「面子」をたたきつけたときの音に由来するものでしょう。パスの類は市内沿岸部と木場湯周辺、大杉谷川中・下流域、日川流域を含む市南部に分布します。

このように、50歳代以上では各地点での「面子」の伝統的方言形が聞かれるのに、30歳代以下では明らかに共通語化していることが分かりました。筆者が金沢大学学生の協力を得て平成19年夏から20年夏にかけて実施したJR北陸本線沿線の石川県加賀地方の倶利伽羅から福井県嶺北地方の今庄までの、地域差と世代差の掛け合わせによるグロットグラム調査(32の駅周辺集落での4世代調査)の結果からは、50歳代以上では各地域の「面子」の伝統的方言形が見えるのに40歳代以下ではメンコ一色となっている状況(小松市内3地点と同様の状況が確認できます)。

連載  
145

### 小松方言の世代差 その4



「おばあちゃん、こっちのえんびつの方がとがつとるね」  
「う〜ん、こっちもケンケンやけどなあ」

今月も「小松方言の世代差」というテーマで続けますが、4月はまた新しい年度のスタートでもあります。本連載は1998年4月の連載開始から、今月でいよいよ13年目に入ります。この間、一度も休まずに続けてこられた自身の健康に感謝するとともに、今後もできるだけ長く続けたいと思います。

#### 「鉛筆の芯がとがった状態」の方言の世代差

今回は前回までの〈遊び言葉の世代差〉からいったん離れて、誰もが学校で使った鉛筆、その「鉛筆の芯がとがった状態」を言う方言の世代差について見てみたいと思います。今回も前回同様、筆者たちの長田町、本折町、符津町での4世代調査(平成20年調査)の結果によるものです。

小松を含む北陸地方では、年齢に関係なく「鉛筆の芯がとがった状態をどう言うか?」と尋ねると、「富山であればツクツク、ツクンツクン、ツンツン、石川であればケンケン(「剣剣」からか)、キンキン、福井であればツンツンといった言い方を当たり前のように答えてくれます。ところが全国的に見ると、北陸地方のように「鉛筆の芯がとがった状態」をさす擬態語の方言を持っている地域は意外に少なく、北陸以外では岐阜・愛知両県(岐阜ではチヨンチヨンなど、愛知ではトキトキ、トキントキンなど)と近畿地方の一部ぐらいで、それ以外の地方では、ただ「トガッテル

(西日本ではトガットル)」としか言わないのです。ある状態をさす方言の擬態語が存在する地域としない地域があるという珍しい例です。

そんなことも知っていたいた上で、改めて小松方言の世代差を見てみると、長田町では40歳代以上でケンケン、本折町では80歳代でケンケラケン、符津町では30歳代以上でケンケンという伝統的方言形が聞かれました。それに対して、長田町では10歳代でトガッテル、本折町では60歳代でトガットル、30歳代でトンガットル、10歳代でトゲトゲが聞かれ、若い世代に向かって伝統的方言形の衰退が確認できます。一方、符津町では20歳代以下でトガッテルとともにピンピンが聞かれました。ピンピンは加賀地方で伝統的方言形のケンケンに代わって若い世代で勢力を伸ばしている新方言形で、その影響かと思われれます。

なお、加賀地方でケンケンからピンピンへの交替が見られるのとは対照的に、福井県では今なお全世代で伝統的方言形ツンツンが健在です。

連載  
146小松方言の世代差  
―味の表現の世代差― その5

カラいもんばかり食べると体に良くないね。給食で使う塩分は2〜3グラムって決まってるよ。(南中学校栄養職員 勇ノ上春美さん)

今回は味の表現から「塩辛い」の意味の表現と「塩味がうすい」の意味の表現の世代差(変容を、前回と同様、筆者たちの長田町、本折町、符津町での4世代調査(平成20年調査)の結果から見ることにします。

## 「塩辛い」の意味の方言の世代差

料理などの味付けで塩分が多過ぎる場合

合に、その味を読者の皆さんは現在どのように表現するでしょうか。共通語の世界では、「塩辛い」「しょっぱい」にあたる言い方です。

長田町では30歳代以上がカラいを、20歳代・10歳代がシヨッパイを使用していました。本折町では80歳代でシオカライとクドイが聞かれたほかは長田町とほぼ同じ状況でした。符津町では60歳代でシオカライ、シオクドイが聞かれましたが、比較的上の世代でも共通語と同じシヨッパイが聞かれました。確実に話し言葉の共通語形シヨッパイが若い世代を中心に浸透していることが分かります。

北陸地方では、石川県能登地方・富山県東部・福井県嶺南地方に、近畿地方から西日本に広く分布するカライ(富山東部にはシオカライも)が見えるほかは北陸地方特有の方言形クドイが分布します。加賀地方のJR沿線では旧松任市以北でクドイが使われていますが、南の美川駅から大聖寺駅間にはなぜかクドイがあまり使われていません。大聖寺を過ぎて福井県嶺北地方に入ると40歳代以上でクドイ

の広い分布が見られますから、なぜ小松などの加賀地方南部にクドイが使用されなかったのか(かつては使用したけれども後に近畿方言形カライに追いやられた可能性も)は今のところよく分かっていません。

## 「塩味がうすい」の意味の方言の世代差

加賀地方では「塩味がうすい」ことをシヨモナイ、シヨムナイ、シヨムナイ、シヨモネー、シヨムネーなどと言います。この類の方言形は石川・富山両県と福井県嶺北地方の福井市以北に特有のもです。小松では、長田町・符津町が60歳代以上の高年齢層でシヨモナイ、50歳代でシヨモネーが聞かれ、20歳代以下では共通語形と同じウスイでした。それに対し、本折町では高年齢層でもウスイが聞かれ、30歳代でシヨモナイが聞かれたもの、若年層はウスイでした。やはり市内中心部の方が周辺部に比べて共通語形ウスイの受け入れが早かったでしょう。

## 続「塩味がうすい」の方言の世代差



子守りはエレーけど、やっぱり孫はえちやけやわ。(本鍛冶町の西出一美さんと孫の拓郎くん)

連載  
147小松方言の世代差  
―疲労感を表す形容詞の世代差― その6

前回は、筆者たちが平成20年にJR倶利伽羅駅から大聖寺駅までの17駅周辺集落で行った4世代調査の結果から、小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での「塩味がうすい」の意味の方言に、50歳代以上でシヨモナイ、シヨモネーが聞かれたと書きましたが、平成10年の田中

鉄哉氏の同様の4世代調査の結果を見ると、長田町の70歳代と島町の50歳代以上でアマイが確認できました。「うすい」の方言の全国分布から、アマイがシヨモナイの類より古いことは明らかですが、この10年間でアマイが急速に衰退していったことが分かります。

## 疲労感を表す形容詞の世代差

では、次に「疲労感」を表す方言の世代差を見ます。今回は、田中鉄哉氏の平成10年の調査で「疲労などで」体に元気がなく、思うように動けなく感じたり、面倒臭く感じたりする状態を何と言いますか?という質問に対して得られた結果を見ます。

田中氏による小松市内3地点(長田町、八日市町、島町)の4世代調査からは、同じ小松市内でありながら、3地点それぞれに少しずつ違った状況が見られます。

長田町では、50歳代以上でダーイ、70歳代でエレー、50歳代以下で共通語形と同じダルイが見られ、八日市町では、70歳代でエレー、50歳代以下でダルイ、30歳代で

ヒドイ、島町では、50歳代以上でヒドイ、50歳代以下でダルイが見られます。そして3地点ともに共通して10歳代ではダルイからの音声変化形ダリーが見られる点にも注目したいと思います。

ちなみに、長田町の上の世代に特徴的なダーイは、金沢市や旧松任市で使われるダヤイの影響を受けたものと思われる。一方、島町の上の世代に特徴的なヒドイは金沢市にも少し見られるヒドイよりも、南の加賀市の高年齢層で使われているヒドイの影響を受けたものと思われる。

なお平成11年に小川有美氏が龍助町・東町の70歳代から10歳代の189名に行ったアンケート調査の結果では、50歳代以上で2割程度見られたヒドイが古い形と思われる、ほかにエレーが全世代で2割前後、ダルイが同じく3割前後見られ、10歳代・20歳代ではやはりダルイから変化した新しい形のダリーが2割程度見られます。

連載  
148

### 小松方言の世代差 その7 「たくさん」と「恐ろしい」の 世代差



楽しい昼食の時間。タント食べて大きくなってね(写真  
真は中海保育所)。

今回は再び、筆者たちが平成20年にJR俱利伽羅駅から大聖寺駅までの17駅周辺集落で行った4世代調査(平成18、22年度科学研究費補助金基盤研究(C))「北陸新方言の地理的社会的動態の研究」(研究代表者 井上史雄)の成果の一部の結果から、小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での「たくさん」と「恐ろしい」の意味の方言の世代差について見ることに

します。

### 「たくさん」の方言の世代差

ここでは『たくさん食へなさい』と言ったときの「たくさん」の部分は何んと言いますか」という質問に対する回答を見ます。

長田町では、70歳代でデカト、50歳代でタント、30歳代・10歳代でタクサンが、本折町では、70歳代でデカトとタント、50歳代・30歳代でタント、10歳代でイッパイが、符津町では、60歳代でタントとイッパイ、50歳代でエツベ、30歳代以下ではイッパイが聞かれました。高年層の一部で聞かれたデカトが最も古い形で、タントがその次、30歳代以下で主に聞かれた共通語形とも一致するタクサン、イッパイが新しい形と考えられます。

タントは、JRの駅で言うと粟津、西金沢駅間の30歳代以上で使われていることが分かりました(20歳代・10歳代はタクサン、イッパイ)。能美市根上総合文化会館音楽ホール「タント」の名は、「たくさん」の意味の方言タントも意識されての

名付けと聞いています。

南の加賀市ではタントがほとんど使われず、代わりに50歳代以上で福井県に続くギョーサンが使われています。また、金沢、俱利伽羅駅間では俱利伽羅、津幡、森本の高年層でデカイコトが少し聞かれたほかは、タクサン、イッパイの普及(共通語化)が目立ちます。

### 「恐ろしい」の方言の世代差

「恐ろしい」にあたる方言としては、小松市内3地点ともに、50歳代以上ではオトロシー(かつての中央語⇨京都語オロシーからの変形)、30歳代以下の若年層ではコワイ(音変化形コウエー、コエーを含む)が聞かれました。コワイはオソロシーの後に関西地方で流行した形ですが、それが東京にも取り入れられて話し言葉の共通語形の地位を得たものです。オソロシーは書き言葉の共通語形のイメージが強いです、小松の若年層にはコワイの方が人気があることが分かります。

連載  
149

### 小松方言の世代差 その8 「馬鹿」を指す方言ダラの行方



「王手!」「あれ?ちょっと待った」「ダラ言うな。『待った』は反則やぞ」(撮影は、市民センター)

この4月からNHKで放送されている連続テレビ小説「ゲゲゲの女房」をご覧でしょうか。筆者も毎回欠かさず見ていますが、このドラマが人気を博しているせいで、最近では方言に関する講演の際や身近な人たちから、ドラマに登場するある方言について度々質問を受けるようになりました。

その質問とは、「ゲゲゲの女房」を見

ていると、ヒロインの父親、そしてヒロインの夫やその両親が、石川県で『馬鹿』を指す方言として盛んに使われるダラやそれに似たダラズを使っている。どうしてあんなに離れた場所でも同じ方言が使われているのか」といった内容です。地元の新聞の投稿欄でも似た内容の投稿を何度か見掛けたことがあります。

そういう質問をする人たちの多くは、ダラが石川でしか使わない独特の方言だと信じていたようです。そして、真宗王国と言われる信仰深い土地柄ですから、「馬鹿」を指す方言でさえ仏教に由来すると考える人が出てきたのです。

小松でも使われるダラについては、本連載の60回(2003年3月)で「ダラは本来『知恵が足りない』の意の『足らず』が、タラズ⇨ダラズ⇨ダラ」と形を変えたものと考えられます。仏教用語の『陀羅尼教』(だらかんにょう)の『陀羅尼』とは関係ありません」と、ごく簡単に触れています。

つまり、ダラは決して石川だけの方言でも、また仏教用語「陀羅尼」に由来する方言でもなく、もとはかつての中央語地

域・京都あたりで生まれた「馬鹿」を意味するタラズ(足らず)が周囲に分布を広げる中で、北陸の石川・富山両県ではダラと形を変えました。また、同じように西に向かつて京都を旅立ったタラズが、山陰の鳥取(ヒロインの夫の出身地境港)や島根(ヒロインの出身地安来)にたどり着いたのが「ゲゲゲの女房」に登場するダラズ、ダラなのです(新潟の一部にはタラズも分布します)。なお、「アホ・バカ」方言の全国分布は、大阪の某民放局のテレビ番組「探偵・ナイトスクープ」で1991年に放送された「全国アホ・バカ分布図の完成」で研究者の注目するところとなりました。

そんな歴史を持つ小松のダラも、筆者たちのJR北陸線沿線の4世代調査によれば、30歳代以下でアホの使用が少し見え始め、10歳代ではダラよりもアホが優勢となっています。今後のダラの行方を見守りたいと思います。

連載  
150

小松方言の世代差 その9  
「かわいい」と「おもしろい」  
の世代差



あら、エチャケナ子やね〜。  
(にっこり笑顔の太田和真ちゃん)

今回も、筆者たちが平成20年にJR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の結果から、小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での「かわいい」と「おもしろい」の意味の方言の世代差について見ることにします。

「かわいい」の意味の方言については、3地点ともに50歳代以上ではエチャケナが聞かれました。50・60歳代ではカワラシ

も聞かれましたが、代表形は何と言ってもエチャケナです。それに対して、40歳代以下ではエチャケナは聞かれず共通語形と同じカワイイを使っていることが分かりました。

エチャケナは古語辞典にも載る、かつての中央語(京都語)の「いたいけな」に由来する方言です。元は「痛い気」の意味で「幼くて痛々しいさま」を表し、さらに「幼くてかわいらしいさま」も表すようになり、それが北陸地方に伝わって、発音を少し変えた形で今も方言として使われているのです。

現代共通語でも「いたいけな」は使われますが、「幼くて罪がない、いじらしい」といった意味で、古語「いたいけな」が表した意味の中の「幼くてかわいらしい、さま」の「かわいい」の意味は、むしろ小松などのエチャケナが受け継いでいるのです。

ただ、今回の筆者たちの調査で分かったことは、志受俊孝『金沢の方言』金沢弁のいろいろ(北国出版社 1983年)にも載っていて、以前は金沢でも使われたはずのイチャケナ(「かわいらしい」)

連載  
151

小松方言の世代差 その10  
「自転車」と「とても」の方言  
の世代差



「通学は、毎日チャリです」(中高校生にとって、自転車は大切な移動手段)

「自転車」については、物そのものが新しいですから江戸時代以前からの伝統的方言が存在するわけではありません。小松市内3地点の50歳代以上では共通語と同じジテンシヤのほか、方言的なジテンシヤも少し聞かれました。そして、興味深いのが40歳代以下で聞かれるチャリンコとチャリです。

チャリンコは東京発信型の「自転車」を指す新方言で、1970年代に全国に広まったと言われているものです。小松市内の3地点もそうですが、JR北陸線沿線の4世代調査の結果からは、北陸地方では、まず全国区のチャリンコが先に使われるようになり(石川・福井両県では主に50歳代からチャリンコの分布が見え始めます)、後にチャリンコの後を追うようにチャリが新たに侵入しているように見えます。チャリはチャリンコの下略形として生まれた関西発信型の新方言です。小松中心部の本折町では20歳代以下で、長田町と符津町では10歳代以下で使われていることが分かりました。チャリンコ、チャリが普及し始めたことで、若い世代

が、松任駅以北ではカワイラシ、カワイに席巻され、聞かれなくなっていることです。それに対して、加賀笠間寺井駅間では60歳代以上でイチャケナ(加賀笠間、小舞子)・エチャケナ(寺井)が聞かれ、小松市内3地点では50歳代以上、さらに動橋(大聖寺駅間)では30歳代以上でまだエチャケナが聞かれ、金沢から離れるほど共通語化(カワイ)の普及が遅れていることも分かりました。ちなみに、富山県内、福井県内のJR沿線ではエチャケナの類は聞かれませんでした。

「おもしろい」の意味の方言については、小松の3地点も含めてJR北陸線沿線の石川・富山両県の範囲で、世代を問わずオモシーが聞かれました。金沢(松任駅間)では関西方言の影響を受けたオモイも少し聞かれましたが、現在のオモシーの使用状況を見る限り、当分はオモシーが使われていくことになりそうです。

ではゲンチャリ(原動機付自転車)、ママチャリ(主婦層向け買い物用自転車)などの言い方もよく使われています。

次に「とても」の意味の方言の世代差を見ます。調査では「とても暑い」という場合の「とても」にあたる言い方を聞いていますが、小松市内3地点では、50歳代以上でテンポニとエライが聞かれました。エライは北陸3県に広く聞かれる形ですが、テンポニはJR北陸線沿線では小松市と加賀市を中心とした範囲にだけ聞かれる方言形です。それに対して30歳代以下ではタツダ(タツタも)とメツチャが聞かれました。タツダは小松市と加賀市を中心に「ただ」の強調形として独自に生まれた新方言と考えられます。一方、関西発信型の新方言形メツチャは、「めっちゃめっちゃ」の「めちゃ」の強調形です。北陸地方でも30歳代以下、特に20歳代以下で急速に普及していることが今回の調査で明らかになりました。

今回は、伝統的小松方言が若い世代に向かって変容する中で、若い世代が関西方言の影響を受けている例として、「自転車」の方言と「とても」の方言の世代差について見てみたいと思います。これまで同様、筆者たちが平成20年にJR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での結果を中心とします。

連載  
152

小松方言の世代差 その11  
「しもやけ」の世代差



昭和38年の「三八豪雪」(撮影地は寿町)。雪かきで、シンバレに悩まされた人も多かったことでしょう。

100年ぶりとも言われた「猛暑」「酷暑」の夏も9月下旬にはようやく終わりを告げ、一転秋の気配が濃くなりました。間もなく北陸はまた冬、そして雪の季節が訪れます。今回は少し気が早いですが、その冬の生活と関係の深い「しもやけ(霜焼)」の方言の世代差を見ることにします。

「しもやけ」の方言の世代差

冬になって低温環境が続くと、手足や耳などが赤く腫れてできることのある「しもやけ」。筆者も「しもやけ」のできやすい体質で、毎年のように痒い思いをしてきました。全国的に見ると、共通語と同じシモヤケは、ほとんど雪の降らない関東地方から南の太平洋側を中心に分布しており、「霜」が原因でできるこの語源意識に支えられた語形と考えられます。一方、東北地方から本州の日本海側の降雪地帯にかつて広く分布した方言形はユキヤケです。雪が降る地域では「雪」が原因でできるこの語源意識が働いたためでしょう。北陸地方でも富山県、福井県のほか、石川県の能登地方にユキヤケが分布していましたが、今回のJ-R北陸線沿線での4世代調査では高年層でもユキヤケはほとんど聞かれませんでした。「しもやけ」を指すユキヤケの衰退には、スキーなどを指して紫外線が肌が焼けることを指して使われることの多い共通語ユキヤケとの同音衝突が影響したと考えられます。

す。

では、北陸地方で「しもやけ」の方言形ユキヤケの分布が見られない石川県加賀地方での方言形が何かと言つと、シンバレ、シンバリでした。今回のJ-R沿線調査でも70歳代以上で比較的多く聞かれ、旧松任市から旧寺井町にかけては50歳代でも聞かれました。小松市内でも長田町と本折町の70歳代でシンバレが確認できましたが、それ以外ではシモヤケしか聞かれず、近い将来、シンバレは小松の方言から消え去る運命にあると言えそうです。シンバレのシンは「霜」ではなく、東北から日本海側の降雪地帯で、ひどく冷えること、濡れた洗濯物などが冷えて固まることを指す方言シニルに由来する「凍腫れ」の変化形と考えられ、加賀地方のほか、東北地方北部や岐阜県北部にも分布が見られます。北海道方言として有名なシバレル(とても冷える、凍る)の意)は、このシニバレから変化したシバレが動詞化した形と考えられています。

連載  
153

小松方言の世代差 その12  
「(雪に足が)はまる」の世代差



昭和56年の「五六豪雪」。足がゴボルほどの大雪も近年は少なくなりました。

今年もまた年の瀬、師走の月を迎えました。小松でもそろそろ雪の便りが聞かれることでしょう。そこで、先月の「しもやけ(霜焼)」に続いて、今回は冬の生活語彙の中から「雪に足がはまる」の世代差を見てみたいと思います。

なお、「(雪に足が)はまる」ことを指す方言の市内での地域差については、本連載23回(2000年2月号)でも取り上げ

ています。

共通語にはない「(雪に足が)はまる」の方言

共通語のお膝元である東京ではほとんど雪が降りません。ですから、雪国北陸の冬の生活にとっては基本的な言葉であっても、東京では使う必要がないので共通語形が存在しないというものがあります。主に「(雪に足が)はまる」ことを指す方言もその一例と言つていいでしょう。

小松市内での「(雪に足が)はまる」の世代差

筆者たちが平成20年にJ-R北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)の結果を見ます。

長田町では70歳代でオチルが聞かれたものの、50歳代以下ではハマルでした。本折町では60歳以上でハマルとの併用で「ボル」が聞かれましたが、50歳代以下ではハマルでした。符津町では50歳代以上ではやはりハマルとの併用で「ボル」が聞か

れ、それより若い世代ではハマルでした。つまり、J-R沿線の市内3地点では、中高年層でこそ伝統的方言形である「ボル」やオチル(寺井町周辺の高年層で使われるウツルは、小松市の北の能美市に広く分布する伝統的方言形で、オチルあるいはオツルからの変化形と考えられています)の使用が確認できたものの、急速に共通語化(雪に限らず使われるハマルの使用)が進んでいることが分かりました。これと似た状況は南の加賀市の三駅(動橋、加賀温泉、大聖寺)周辺でも確認できました。

一方、今回のJ-R北陸線沿線調査では、松任駅以北の北加賀地方で「ボル」が根強く(30歳代以上で)使われていることが確認でき、「(雪に足が)はまる」については、金沢市を含む北加賀地方より南加賀地方の方が共通語化が進んでいるという意外な結果となりました。「ゴボル」が金沢市方面から南に勢力を拡大したものの、小松市や加賀市ではそれが50歳代以下にまで普及する前に共通語ハマルが勢力を伸ばしたためかもしれません。

連載  
154小松方言の世代差 その13  
—接続助詞「から」の世代差—

「先生、外で遊びたいよー!」「雨降つとるしだめやわ。じゃあ部屋の中でジャンプして遊ぼう」

明けておめでとございませす。引き続き本連載をご愛読ください。

今年も昨年1月号から始めた「小松方言の世代差」のテーマを続けます。今回は文法事象の世代差を取り上げますが、これまで同様、筆者たちが平成20年にJR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での結果を中心に述べることにします。

## 順接の接続助詞「から」の方言の世代差

「普段家の人や昔からの友達と気を使わずに話すとき」「雨が降っているから行くのはやめろ」の「降っているから」ところはどう言いますか」という質問に対して答えられた、理由を表す順接の接続助詞「から」にあたる方言の世代差を見ます。

小松市内3地点での調査結果を見ると、長田町、本折町、符津町のいずれにおいても、50歳代以上では「アメ フットル サカイ」のように、「サカイ(サケイ、サケの形も)」類が使われています。それに対して30歳代以下では、サカイ類は聞かれず、「アメ フットルシ」のように「シ」が使われています。

50歳代以上で聞かれたサカイ類のうち、サケイはサカイ「sakai」の「e」が母音融合で「a」と長音化した形で、サケはさらに「e」の長音が脱落した形です。つまり、サカイが最も古い形で、その音声変化形としてサケイ、さらにサケが生まれたと考えられます。サカイ類の全国分布

を国立国語研究所編『方言文法全国地図』

(第1集33図)で見ると、近畿地方を中心に、北陸地方から東北地方の日本海側にサカイ、サケ、スケ、シケなどの形で連続した分布を見せており、室町時代以降の京都語サカイが、かつての日本海側の海上交通路によって北に運ばれた結果と考えられています。

一方、「シ」は順接の接続助詞として関西地方で新しく生まれた新方言形です。南の福井県では、高年層のサカイ、サケに、愛知県など中部地方からの伝播と思われる「デ」の広い使用に阻まれて、シは10歳代の一部を除いてまだほとんど使われていませんが、石川県では金沢市がいち早く関西新方言形のシを受け入れ(50歳代でもシを使用)、サカイ類に代わるものとして金沢市から周辺に着実に勢力を伸ばしていることが今回の調査からも確認できています。

連載  
155小松方言の世代差 その14  
—「買わない」の世代差—

「いいちゃん、このおもちゃ欲しい〜」「さっきもコータシ、もうコワンよ」

今回も前回に続いて文法現象の世代差を取り上げます。今回は否定形「打消形」の「買わない」の世代差を見ることにします。これまで同様、筆者たちが平成20年にJR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での結果を中心に述べます。

## 「買わない」の方言形の世代差

長く京都を中心とした近畿地方の方言の影響を受けてきた北陸地方の方言では、「買わない」にあたる方言形はもともとカワンでした。学校文法的に説明すれば、カワンは動詞「買う」の未然形カワに否定(打消)の助動詞「ず」の連体形(後に終止形としても使われた)「ぬ」から変化した形が付いた形です。

ところが、小松市以北の加賀地方の方言では50歳代以上の世代で「コワン」の形が聞かれることがあります。今回の筆者たちの調査でも本折町の70歳代と符津町の60歳代で「コワン」が聞かれました。もともとカワンが使われていた小松市以北の加賀地方でなぜ「コワン」という形が生まれたのか。このことについては、ことばの体系性という点から興味深い事実が確認できます。

京都語を中心としたかつての日本語の歴史を見ると、中世時代にアウ「e」連母音「o」に変化しました(中世末期までは現在のオーよりも口の開きの大き

いオーだったと考えられています)。例えば「道具(だうぐ)」がドゥグと発音されるようになったのも、この時代の変化によるものです。この時期に、「買う(買ふ)」のようなかつての八行五段動詞の終止・連体形も「買う」が「コ」、「洗う」が「アロー」のように変化し、それが北陸地方に伝わり、中央語ではその後、表記に引かれて再びカウやアラウに戻ったのに、石川県方言では今も中年層以上で「コ」のまま使われているのです。その結果、終止・連体形「コ」の「こ」で活用語幹を統一しようとして、ある時期「コワン」(場所によっては「コイタイ」、「エバ」などの形も)が生まれたと考えられるわけです。

その「コワン」も今や衰退しつつあり、長田町では4世代とも、本折町と符津町でも50歳代以下ではカワンしか聞けませんでしたが、ただ、多くの方言が共通語化に向かう中で、「買わない」のような動詞の否定形(打消形)では「コワン」こそ使われなくなりつつあるものの、中学生を含む若年層まで、方言形カワンがしっかり使われていることは頼もしいことです。

連載  
156小松方言の世代差 その15  
「行かなかった」の世代差

「去年はどこもイカンカツたね」「今年は旅行したいね。沖縄とか?」「行きたいー!」

今回も前回に続いて否定形の世代差を見ることにします。今回は共通語の「行かなかった」にあたる方言の世代差を取り上げることで、小松での否定過去表現の変化について見てみたいと思います。

## 否定過去表現の世代差

否定過去表現は、共通語では「動詞未然形+なかった」の形で表現されますが、筆

者たちが平成20年にJR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点での結果では、「行かなかった」にあたる方言形として、本折町の80歳代でイカナダが聞かれたほか、70歳代以下の広い世代でイカンダ、そして50歳代以下、特に30歳代以下でイカンカツタが聞かれました。

このような状況から、小松では古くはイカナダが使われていましたが、その後にはイカンダが使われるようになり、さらに新しくイカンカツタが使われ始めたという歴史が推定されます。つまり、小松での動詞未然形に付く否定の過去を表す方言形式は、「ナンダ」「ンダ」「ンカツタ」と変化したことが分かります。

否定過去表現の全国分布を見ると、ナンダはかつての中央語地域の近畿地方を中心に、北陸全域も含んで、長野・山梨・静岡の一部から西、四国の瀬戸内海側、鳥取・岡山から東の広い範囲に分布している、かつて京都を中心に東西に分布を広げた跡を見ることが出来ます。一方のナンダは、ナンダの分布域の中の加賀地

方南部(松任から南)と三重・奈良の一部にまとまった分布が見えます。

ナンダの分布域でナンダが生まれていることについては、「ナンダのナが落ちた」と考えれば分かりやすいのですが、「ナンダ」とは関係なく、否定のンに過去のダ(過去のタは「読ンダ」のように)に続く場合はダになることへの類推で)を付けた結果と解釈する研究者もいます。

ンカツタは、本連載の45回(2001年12月)でも取り上げていますが、専門家の間で「ネオ方言」と呼ばれている、共通語の干渉を受けて成立した方言と共通語の中間的スタイルの一つで、ンカツタの場合、方言形の行カ(行かない)+共通語形の行カナカツタの傍線部が組み合わさった形と考えられます。近畿地方を中心に西日本地域で勢力を拡大している新しい方言形です。

連載  
157小松方言の世代差 その16  
「高くない」「行かなくて」等の世代差

「立派なカニ。高いんでしょう?」「シーズン終わりのカニはタコネーし、お買い得だよ」(3月15日、本折町の山岸鮮魚店にて撮影)

今年もまた4月の新年度を迎え、本連載も14年目に入りますが、テーマは当分の間、「小松方言の世代差」ということで、さまざまな方言事象の世代差(変化)を取り上げていくことにします。今回も前回、前々回に続いて、否定表現関連の事象の中から、共通語の「高くない」(形容詞の否定形)、「なら」「ある」の反対語、そして「行かなくて」にあたる方言形の世代差

を取り上げることにします。

## 「高くない」「なら」の世代差

JR北陸線沿いの小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での「高くない」にあたる方言形の世代差については、3地点ともに、50歳代以上ではタコネーが使われていますが、30歳代以下では共通語化したタカクナイが使われています。

タコネーのタコの部分は、本来タカクだったものが、中央語(京都語)で平安時代に発生した音便現象によって、タカク↓タカウ↓タコーの変化が起こり、それが北陸にも伝わって最後の長音を落とした形と考えられます。一方、タコネーのネーは、ナイ[na]の「a」の部分が「e」に変化した形で、このような変化は「ある」の反対語の「ない」にあたる方言形も含めて、加賀地方の金沢市以南から福井県の嶺北地方にかけて集中して見られる現象です(それに対して、金沢市から北と福井県の嶺南地方や滋賀県ではナイが分布します)。

ところで、「高くない」の「高く」の部分

がタコ(滋賀県ではタコー)となるのは金沢市以南で、金沢市でも森本から北では富山県も含めてタカ(タカナイ)となります。

## 「行かなくて」の世代差

小松市内3地点での「行かなくて」にあたる方言形については、3地点ともに、50歳代以上で伝統方言形のイカンデが見られ、30歳代以下ではイカンデに混じって新しい方言形であるイカンクテの使用が見られます。先ほどの「高くない」では30歳代以下で共通語化が見られましたが、「行かなくて」のイカンクテは、「行かない」にあたる伝統方言形イカンに共通語形のイカナクテが干渉し、「イカン(方言形)+クテ(共通語形)」となったネオ方言形と呼ばれる形です。近畿地方で生まれ北陸に勢力を伸ばしている形で、加賀地方では、金沢、松任方面にいち早く普及して、それが小松にも影響を与えているようです。

ところで、「高くない」の「高く」の部分



連載 158

小松方言の世代差 その17  
「正座する」と「胡座をかく」の世代差



「オツクバイしとつたら足がしびれたわ」「わしゃアグチカイとつたし大丈夫じゃ」

だければと思います。  
「正座する」の世代差

本連載15回目的の記事を見ていただくとは分かりますが、1996年から1998年にかけての調査では、小松市内で50種以上の「正座(すま)」にあたる伝統的方言形の分布が見られました。その多くは動詞「つくばう(蹲う)」に由来すると考えられるオツクバイ(カク)の類で、オツクバイのほかには、ウツブラ、ウツブカイ、ウツブキなどが代表的な方言形として聞かれました。

ところが、筆者たちが2008年にJR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での結果では、長田町の70歳代でウツブカイ、本折町の80歳代でオツムカイ、60歳代以下ではセーザスルしか聞くことができませんでした。高年齢層でこそ、かろうじて伝統的方言形が聞かれるものの、「正座する」にあたる言い方は急速に共通語化が進行していることが分かりました。福井県嶺北

地方(大聖寺も)では、今もなお若い世代にまで伝統的方言形のオチヨキンスルが根強く使用されていますから、対照的な現象と言えます。

「胡座をかく」の世代差

「正座(すま)の伝統的方言形には多様な語形の分布が見られたのに対して、「胡座をかく」にあたる伝統的方言形は、小松市内ほぼ全域でアグチカクが使われていました。本連載15回目でも述べているように、アグチカクのアグチとは、足袋などの足のはき入れる口を意味する「開口(あきくち)」の部分で足を組むことに由来します。アキクチがアキグチ→アイグチ→アグチと発音を変えた形です。ところが、JR北陸線沿線の4世代調査では、本折町の高年齢層(80歳代)でアグチカクの使用が確認できるだけで、長田町、符津町では全ての世代がアグラカクでした。ここでも、共通語形アグラカクの急速な普及が確認できるのです。

連載 159

小松方言の世代差 その18  
「くすぐる」と「くすぐった」の世代差



「コチョバシあいつこしょ〜」「お兄ちゃん、やめて〜」

合の多少改まった言葉の2つの場面に分けて使用語形を聞いていますので、そのことについても触れてみたいと思います。

「くすぐる」の方言形の世代差

〈普段家の人や友達と気楽に話す場合〉については、長田町では4世代全てでコチョバスが、本折町では50歳代以上でコチョガス、30歳代以下でコチョコチョスルが、そして符津町では30歳代以上でコチョガス、10歳代でコチョバスが聞かれました。つまり、普段気楽な相手と話す場合には伝統的方言形コチョバス、コチョガスが若い世代にまで比較的よく使われていることと、本折町では若い世代でコチョガスからコチョコチョスルに変化していることが確認できました。一方、テレビに出てアナウンサーと話す場合では、長田町・符津町の50歳代以下でコチョバス、コチョガス、本折町の30歳代以下でコチョコチョスルを使う人がわずかにいたものの、ほとんどの人が共通語形クスグルを使うと答えています。

「くすぐった」の方言形の世代差

次に、〈普段家の人や友達と気楽に話す場合〉での「くすぐった」にあたる言い方を見てみます。長田町では50歳代でコンバイ、10歳代でコチョバシー(70歳代と30歳代でクスグッタイも)が、本折町では80歳代と30歳代でコシヨガシー(30歳代ではコンバイも)、10歳代でコチョガシーが、そして符津町では全世代でコチョバシー(50歳代以上でわずかにクスグッタイも)が聞かれました。テレビに出てアナウンサーと話す場合では、粟津の50歳代以上でコソバシー、20歳代以下でコチョバシーが聞かれたものの、長田町と本折町では全世代が共通語形クスグッタイのみでした。

以上のように、「くすぐる」と「くすぐった」については、普段の気楽な場面では方言形を使う人も、テレビに出たら共通語形というように、場面によって使い分けようという意識の人の多いことが分かりました。

連載  
160

小松方言の世代差 その19  
「大きい」と「小さい」の世代差



「この絵本、すてくデッカイね」(空とこども絵本館にて)

今回は日常的にも使用頻度の高い形容詞の「大きい」と「小さい」にあたる小松方言の世代差を見たいと思います。これまで同様、筆者たちが2008年にJR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)の結果からご紹介しますが、「地元で、自分の親や仲の良い古くからの知り合い・友人とくつろいで話す場合の言い方」を教

えて下さいということで、「こんなに大きい魚が釣れた」と言つときの「大きい」の言い方と、「こんなに小さい魚しか釣れなかった」と言つときの「小さい」の言い方を尋ねた結果を取り上げます。

「大きい」の方言形の世代差

「大きい」の方言形については、小松市以北の加賀地方で、60歳代以上の高年層に「デッカイ」の分布が見られます。ただ、小松市内の3地点では、「デッカイ」が聞かれたのは60歳代のみで、70歳代以上では「デカイ」が聞かれていますので、「デカイ」の變化形(強調形)として促音が挿入された「デッカイ」が生まれたと考えて良さそうです。50歳代から30歳代にかけては「デカイ」「デッカイ」の「ai」の部分「e」に変化した「デケ」「デケケ」(「デケ」も)が多く聞かれます。そして、20歳代以下では再び「デカイ」が聞かれ、特に中学生ではオーキーも聞かれます。オーキーが共通語の影響であることは明らかですが、20歳代以下の「デカイ」は、高年層の伝統方言形「デカイ」と同じではなく、いわゆる共通語の

俗語形としての「デカイ」を受け入れたものと考えられます。

「小さい」の方言形の世代差

「小さい」の方言形については、まず長田町、本折町の70歳代以上で「チンコイ」が聞かれました。似た形の「チッコイ」は、本折町の60歳代と小松市の北、JRの駅で言うところの小舞子、松任、野々市の周辺集落の高年層でも聞かれましたが、「チンコイ」は、今回の調査では小松市内にのみ確認できます。50歳代以下の使用状況は、長田町が50・30歳代で「チッチャイ」、10歳代で「チーサイ」、本折町が30歳代で「チンコイ」、10歳代で「チッチャイ」、符津町が50・30・10歳代全てで「チッチャイ」でした。50歳代以下で聞かれた「チッチャイ」も話し言葉を中心とした共通語形と見れば、共通語化と言つてよさそうですが、書き言葉としても使われる共通語形の「チーサイ」はほとんど聞かれませんでした。

連載  
161

小松方言の世代差 その20  
「自動車学校」の呼称の世代差



自動車学校(シャコー)で基礎をしっかりとマスターし、安全運転でいきたいですね。

今回は、上の世代では地域差がなかったのに、若い世代で新たな地域差が生じている例として、「自動車学校」の呼称の世代差を取り上げます。上の世代の方は、「ジドーシャガッコ」以外に言い方があるのかと思われるかもしれませんが、若い世代(運転免許証がまだ取れない17歳以下は別として)では、別の言い方をすることが増えているのです。

石川県と福井県では「シャコー」

これまでも紹介してきた、筆者が金沢大学学生の協力を得て石川県加賀地方から福井県嶺北地方のJR北陸本線俣利伽羅駅から今庄駅までの33の駅周辺集落で行った4世代調査の結果をはじめ、新潟県谷浜駅以南から富山県、さらに福井県に続く滋賀県の湖西線ルート(京都駅まで)の4世代調査の結果を収めた科学研究費研究成果報告書『北陸方言の地理的・年齢的分布(北陸グロットグラム)』(研究代表者・井上史雄、2011年3月刊)で小松市内3地点の結果をまず見ると、長田町では30歳代以上で「ジドーシャガッコ」のみ、本折町と符津町では50歳代以上では「ジドーシャガッコ」、20・30歳代で「シャコー」が聞かれました。小松市から北の加賀地方でも20・30歳代(二部地点では40歳代でも)は「シャコー」が広く普及していることが確認できますし、福井県嶺北地方では20・30歳代だけでなく40・50歳代でも「シャコー」がかなり聞かれ、石川県より「シャコー」の普及が早かったらしいこと

が分かります。「シャコー」は「自動車学校」の傍線部をつなげた形の略称です。ただ、小松市以北と福井県嶺北地方に挟まれた加賀市の3駅周辺集落では「シャコー」がほとんど聞かれず、金沢方面から普及し始めた「シャコー」は加賀市までは及んでいないことも分かりました。

富山県では「ジコー」、新潟県では「シャガク」

先の報告書で富山県と新潟県の結果を見ると、20・30歳代で、富山県では「ジコー」、新潟県では「シャコー」のほかに「シャガク」が聞かれ、北陸地域で新しい地域差が生まれていることが分かります。「ジコー」は「自動車学校」の傍線部、「シャガク」は「自動車学校」の傍線部による略称です。一方、滋賀県では「キョーシュージョ」が多く聞かれます。滋賀県では、正式名称に「自動車教習所」が多く使われているためです。正式名称が「自動車教習所」の沖縄県では「ジレ」の言い方も生まれています。

連載  
162

小松方言の世代差 その21  
「うつつしい」の呼称の世代差



まだまだ暑い日が続くけれど、キミたちのフサフサな毛はイジクラシくないのかな？(木場湯公園中央園地のドッグランにて)

### 「うつつしい」の方言形の世代差

「うつつしい」の方言形とは、調査で「忙しいときに子どもがまとわりついたりしたときの、うるさい、いらいらするよいうな気持ちを何と言いますか」という質問に対して回答された方言形です。

結果は、長田町では、70歳代がイジクラシーとイジッカシー、50歳代がイジッカシー、30歳代がウザイ、10歳代がウツトシー、本折町では、80歳代がウザクラシー、50歳代がウザクラシーとイジッカシー、30歳代がイジクラシーとイジッカシー、10歳代がウザイ、そして符津町では、60歳代がウザクラシーとイジクラシー、50歳代がウザクラシー、20歳代がイジッカシー、10歳代がイジッカシーとウザイでした。

以上、3地点での結果を整理すると、50歳代以上の世代ではウザクラシーとイジクラシー(イジッカシーも)が主に使われ、50歳代から30歳代にかけてはイジクラシーからの音声変化形として生まれたイジッカシーが中心となり、10歳代ではイ

ジッカシーと共に、東京発信型の新方言として全国に広がりつつあるウザイ(新方言として広がり始めた当初はウザッタイでしたが、その後、短縮形のウザイが生まれましたが小松市内でも使われ始めていることが分かりました。

### イジッカシーとウザイの闘いの行方は？

南の福井県嶺北地方では、高年齢を中心としたウルサイの使用に対して、ウザイが50歳代あたりまでいち早く普及しているのに比べ、石川県加賀地方(倶利伽羅駅〜大聖寺駅)では、似た意味の方言形イジッカシー(イジクラシー)が今もよく使われているために、ウザイの侵略を阻んでいたのですが、今回の調査結果からは、10歳代ではウザイの侵略が始まっていることが確かめられました。今後の加賀地方でのイジッカシーとウザイの闘いの行方を見守りたいと思います。

連載  
163

小松方言の世代差 その22  
「ありがとう」「大丈夫だ」の世代差



「お茶でもどうぞ」  
「あら、アンヤト、キノドクナ」

今回は、感謝の挨拶言葉の「ありがとう」、そして「大丈夫だ」にあたる方言の世代差を見てみたいと思います。

### 「ありがとう」の方言の世代差

人に感謝の気持ちを述べるときの小松での方言的表現は、私たちのJR北陸本線沿線世代別調査では、長田町と符津町の50歳代以上でキノドクナが聞かれたほ

か、本折町では70歳代から30歳代の範囲符津町では50・60歳代でアンヤトが聞かれました。しかし、20歳代以下では3地点ともアリガトーだけでした。

キノドクナは、全国的に見ても北陸三県でしか聞かれない「ありがとう」にあたる特徴的方言形です。北陸以外の人には、感謝されることをして、なぜキノドクナと同情されるのかと不思議がられます。北陸方言のキノドクナは、本来、自分によくしてもらったことで相手に負担をかけたことを気の毒に思っ、そしてそのことに感謝の気持ちを込めたキノドクナであったわけですが、共通語の「気の毒な」は他人に対する同情の意味で使われるので誤解されやすいのです。一方、アンヤトはキノドクナよりも新しく金沢を中心に加賀地方で分布を広げた形と考えられます。アリガトーの発音が変化した形で、加賀地方南端の大聖寺までの範囲に聞かれます。

ただ、今回の調査結果からは、キノドクナもアンヤトも若い世代では使われなくなり、共通語形のアリガトーに取って代

わられていることが分かりました。

ちなみに、南の福井県嶺北地方でもキノドクナは50歳代以上でしか聞かれず、多数派は近畿地方から伝わったオーキニとなつています。そして、30歳代以下ではアリガトー一色になりつつあることも分かりました。

### 「大丈夫だ」の方言の世代差

「謝る友達に『だいじょうぶだ』と答えるとき何と言いますか」という質問に対する回答の世代差です。

小松市内3地点では、50歳代以上で加賀地方に特徴的なジャマナイや福井県嶺北地方に通じるダンネが聞かれ、50歳代から30歳代の範囲ではドーモナイと、それからの変化形のドモナイ、ドモネ、ドーモネ、ドンネなどが聞かれました。ドモナイは符津の20・10歳代でも聞かれましたが、20・10歳代の中はダイジョーブでした。

連載 164

小松方言の世代差 その23  
「く〜ってしまった」と「く〜けれど」の世代差と場面差



「このDVD、借りてみようか?」「それ、この前見テシモタし、別のにしよっさ」

今回も、JR北陸本線沿線世代別調査(グロットグラム調査)の結果から、長田町、本折町、符津町の「く〜ってしまった」と「く〜けれど」にあたる方言の世代差についてご紹介するともに、場面差についても見ることにします。

普段の言い方とテレビに出たときの言い方

場面差とは、「この番組はもう見てし

まった」という例文と「寒いけれどもがまんしよう」という例文を示して、傍線部にあたる普段家で話す場面での言い方と、テレビに出て話す場面での言い方を尋ねたことを指します。

「く〜ってしまった」の方言形の世代差と場面差

普段家で話す場面での「見てしまった」にあたる言い方は、50歳代以上では3地点ともミテシモタでした。つまり、「く〜ってしまった」の小松の伝統方言形は「テ」シモタであることが分かります(南の加賀市では、ミテシモタは60歳代以上でしか聞かれず、50歳代から30歳代にかけては福井県嶺北地方の影響を受けたと思われるミテモタが使われています)。それに対して30歳代以下では、ミタかミタワが多くなり、長田町の10歳代では話し言葉的共通語形ミチヤッタも聞かれました。

一方、テレビに出て話す場面では、小松市内の3地点いずれも、世代に関係なく、全員が共通語形ミテシモタを使うと答えていて、普段の場面では伝統方言形を

使っている上の世代の人たちも、テレビ出演のような改まった場面では共通語に切り替えようとしていることが分かりました。

「く〜けれど」の方言形の世代差と場面差

普段家で話す場面での「寒いけれども」の「く〜けれど」にあたる言い方は、3地点とも世代に関係なくケドが使われていました。ただ、「寒い」にあたる部分では、本折町、符津町を中心に、サムイに混じってサバイを使っている人が全世代にわたって半数近くいることも分かりました。

テレビに出て話す場面では、「寒い」の部分では全ての世代がサムイを使うと答え、サバイを使うという人は見られなくなります。「く〜けれど」にあたる言い方については、50歳代以上では「ケレドモ」の使用が多くなる(場面でも切り替えている)のに対して、30歳代以下では普段の場面と同じケドを使うと答えていました。

連載 165

小松方言の世代差 その24  
「選り歌」と「組分けじゃんけん」の掛け声の世代差



「二組に分かれるよ〜」「グートパーデ ワカレマシヨ!」

今回は今年最後の月。来年が良い年になるかどうかを占うわけではありませんが、複数あるものから一つを選ぶとき「選り歌」にしようかなと「選り」の方で始まる選り歌、遊びの時などに二つに分けするときのじゃんけんの掛け声の世代差を取り上げます。

「選り歌」の世代差

筆者もそうですが、比較的上の世代の人にとって、複数あるものから一つを選ぶときの選り歌は、「ドチラ(ド)ニニ ヨーカナ カミサマン ユートーリ」といった短い詞章で終わったように思いますが、選り歌の全国分布を調べた最近の調査結果をいくつか見てみると、若い世代に向かって次第に詞章が長くなる傾向が見られ、その詞章に様々なバリエーション、新たな地域差が生まれていることも分かっています。

前号までと同様、JR北陸本線沿いの小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での4世代調査結果を見ると、全世代で、「ドチラニ ショーカナ カミサマン」 ユートーリの詞章は共通しています。また、40歳代以上がそこで終わるのに対して、30歳代以下では、本折町でそのあとに「アノネノネ」が続く、10歳代では「テッポーウツテ バンバンバン イチ ニーサン シー」と続きます。符津町でも30歳代で「テッポーウツテ バンバンバン、10歳

代で「テッポーウツテ バンバンバン モヒトツオマケニ バンバンバン」というのが聞かれました。「鉄砲打ってバンバンバン」の詞章は東北、関東、北陸地方などによく聞かれるものです。

「組分けじゃんけん」の世代差

これについても興味深いのは、小松市内3地点に関しては、30歳代以下でしか組分けじゃんけんの掛け声が得られていないことです。30歳代以下では、いずれの地点でも「グートパー」を含み、本折町の10歳代では「グッパ」の形も聞かれました。長田町の10歳代では「グートパーデ ワカレマシヨ」、本折町の30歳代以下では「グートパーデ インジャンホイ」でした。

このように、同じ加賀地方でも、小松を含んだ松任以南では「グー」と「パー」で分かれるのに対して、野々市から北では、「グー」 「グーキー」で始まる掛け声からも分かるように、「グー」と「キー」(「チヨキ」)で分かれるのが一般的という地域差も見られます。

連載  
166

小松方言の世代差 その25  
「もつれる」の方言の世代差



「イヤホンつてすぐムダカルさけ、いやなんや」

明けましておめでとございませう。

昨年は、3月11日に起こった東日本大震災によって、我が国にとっては悲しく、つらい年となりましたが、今年是被災者の皆さんにとって少しでも良い年になることを祈りたいと思います。

さて、一昨年の1月号から始めた「小松方言の世代差」のテーマも、今月から足か

け3年目に入りますが、今しばらくこのテーマで続けたいと思います。これまで同様、筆者たちが平成20年に加賀地方のJ R北陸本線沿線17集落で行った4世代調査の、小松市内の3地点(長田町、本折町、符津町)の調査結果を中心に取り上げていきます。

「もつれる」の方言ムダカルの衰退

調査での「もつれる」にあたる言い方を聞く質問文は、「細い紐ひもや糸、あるいは髪の毛などが、からまってもつれるもつれることを何と言いますか」というものでした。

長田町では、70歳代、50歳代では伝統方言形ムダカルが聞かれましたが、30歳代、10歳代ではカラマルでした。本折町では、50歳代でムダカルが聞かれた以外は、70歳代と50歳代でモツレル、カラム、30歳代でカラマル、10歳代でカラマル、カラムでした。そして、符津町では60歳代でモツレル、カラマル、50歳代以下はカラマルのみが聞かれ、ムダカルは聞かれませんでした

た。

以上から、J R北陸本線沿いの小松市内では、伝統方言形ムダカルの衰退が確実に進みつつあり、共通語形モツレル、カラマル、カラムに取って代わられていることが分かります。

ちなみに、小松以外での世代別調査の結果を見ると、金沢市中心部や旧野々市町、旧松任市域では、小松よりもさらに共通語化が早く、全ての世代でムダカルを聞くことができませんでした。それに対して、金沢市の森本以北や能美市、そして南の加賀市域では、小松と同様に50歳代以上でムダカル(モダカル、モダケルを含む)、30歳代以下でカラマルが使用されていました。

このように、加賀地方では50歳代以上でしか使われなくなっているムダカルですが、南の福井県嶺北地方では30歳代まで使用が確認でき、加賀地方の共通語化の方が早いことが私たちの調査で分かっています。

連載  
167

小松方言の世代差 その26  
「命令形」「しろ」「見る」の方言の世代差



「お母さん、絵を描いたから見て～」  
「忙しいから後でね」「え～、ちゃんと今見テマ～」

小松方言の世代差として、今回は、サ変動詞「する」と二段動詞「見る」の命令形の「しろ」と「見る」にあたる方言形の世代差を取り上げます。これまで同様、筆者たちが加賀地方のJ R北陸本線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)の調査結果を中心にすることにしますが、「見る」の世代差については、本連載の47回「新しい方

「しろ」「見る」の方言形の世代差とシロマイの発生

言④ オキレ、ミレ、アケレ(2002年2月)でも取り上げたことがあります。

「しろ」にあたる方言形は、市内3地点ともに、30歳代以上で、伝統方言形のセーあるいはセーマが根強く使われています。セー、セーマより強い命令形としてセンカイ、センカイヤが使われることもあります。しかし、セー(セーマ)、センカイ(センカイヤ)などの伝統方言形は10歳代ではほとんど使われなくなっていて、この世代では、共通語化によるシロ、そしてわずかですが、共通語形シロの干渉を受けて方言形セーマとの中間スタイルとして生まれたシロマが使われています。

方言形と共通語形の中間スタイルとしてのシロマについては、小松市内よりは金沢市近辺の若年層により多く聞かれる形です。数年前のある日、県内のある警察から筆者の研究室に電話があり、県内のあるコンビニに押し入った強盗が、お金を出すのにぐずぐずしている店員に向

かつて「はよシロマ」と叫んでいるのが監視カメラの音に入っているのだが、シロマという言い方はどの辺で使うのかと聞かれて、考えを述べたことがあります。その強盗が捕まったのかどうかは知りませんが、金沢市近辺から小松市あたりにかけての20歳代以下の若者だったのでないかと考えています。

「見る」の方言形の世代差

「見る」にあたる方言形も、30歳代後半以上の世代では市内3地点ともに、伝統方言形のミーあるいはミーマが使われています。一方、30歳代前半以下の世代では、少し優しい命令形にあたるミテ、ミテマが使われています。また、本折町の30歳代前半から20歳代後半にかけてはミレも聞かれました。ミレは、連載47回でも説明したように、ラ行五段動詞の命令形「走レ、取レ」などの形に類推して生じた形です。全国的には東北地方の日本海側や九州地方にまでとまって見られるものです。

連載  
168

小松方言の世代差 その27  
「買った」「借りた」の方言の  
世代差―



「今日はこの本をカッテいこうか」  
「えっ、図書館なのに借りるんじゃなくて買うの?」

前回に続いて、小松方言の文法事象の世代差を取り上げます。具体的には、小松市内の長田町、本折町、符津町での4世代調査の結果から「買った」と「借りた」にあたる方言の世代差です。

### 「買った」の共通語形カッタと「借りた」の方言形カッタの同音衝突をめぐって

今回取り上げる「買った」と「借りた」の

方言の変化(世代差)については、「同音衝突」という現象がからんでいます。

同音衝突とは、「科学」と「化学」、「市立」と「私立」のように、発音が同じで意味の違う単語が同一の場面で使われるような場合を言います。この場合、発音を聞いただけでは意味が区別できませんから、「科学」に対して「化学」、「市立」に対して「私立」のように、片方あるいは両方の発音(語形)を変えて同音衝突を避けようとしているわけです。

「買った」と「借りた」の方言をめぐっても、小松市を含む北陸地方の方言、さらには北陸地方を含む西日本の広い範囲の方言で、伝統方言の「借りた」の意味のカッタと、共通語化で新たに使われ始めた「買った」のカッタが同音衝突を起こすことになったのです。

ところで、北陸を含む西日本の方言で「借りた」の伝統方言形がカッタであったのは、共通語の「借りる」が一段動詞で、タ形は音便化せずカリタであるのに対して、西日本では「借りる」の意味の五段動詞(古くは四段動詞)「借る」が使われたた

め、同じ五段動詞「取る」のタ形が促音便形「取った」になると同様にカッタであったためです。

そこで、小松市内の「借りた」と「買った」を比べると、「借りた」の方言形カッタが「買った」の共通語形カッタとの同音衝突を避けるため、いち早く「借りた」の共通語形カリタを受け入れていることが分かりました。長田町、本折町、符津町のいずれにおいても、50・60歳代で伝統方言形カッタもわずかに聞かれたものの、全世代でカリタが使用されています。

一方、「買った」の伝統方言形「ータは、当面衝突する語がなかったので50歳代以上では比較的根強く使われていることが分かりました。しかし、皮肉なことに「借りた」がカッタからカリタに変化したことで、「買った」との同音衝突が回避できるようになり、「買った」の共通語形カッタが40歳代以下で急速に広まっているのです。

連載  
169

小松方言の世代差 その28  
「お父さん」の呼称の今昔と  
世代差―



「たくさん練習してオートサンみたいに強くなりた  
い」。山元大輔さんと娘の優奈さん(小松桜木剣正  
会)。

今年はいよいよ冬でしたが、新年度を迎えて、また桜の季節がやってきました。東日本大震災から1年が過ぎましたが、被災地の皆さんの心にも少しずつ暖かな春が訪れることを願っています。

1998年4月にスタートした本連載は今月からいよいよ15年目に入りますが、今しばらく「小松方言の世代差」の話題にお付き合いください。

### 「お父さん」の呼称の方言、今昔

平成20年に加賀地方のJR北陸本線沿線17集落で行った4世代調査では、「お父さん」の呼称について、①子どもの頃はどっ言っていたか、②今はどっ言っているか、という2つの場合に分けて聞いています。今回はその時の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での調査結果から、小松方言の「お父さん」の言い方の個人の中での変化と、現在の世代差について見てみたいと思います。

小松市全域(105地点)の「お父さん」の呼称の方言分布については本連載29回(2000年8月号)でも取り上げたことがあり、「お父さん」の呼び方の多様な方言形を紹介しています。市内の広い範囲で確認できたトート類(トート、トートー、トト、トトー)、ツーツ類(ツーツ、ツーツー、ツー)、のほか、オートー類のオートー、オットーが津上川流域の一部と梯川流域、オトトが大杉谷川上流域、日本海沿岸部、南部の日用川流域などに見え、トート類、ツーツ類より古い方言形と思われる

マ、マーマも比較的広い範囲で聞かれました。

### JR沿線ではトーチャン、オートーサンが主流

今回のJR沿線の4世代調査では、本折町の80歳代で子どもの頃も現在も共にオトツァンが聞かれた以外は、子どもの頃の呼称で50歳代以上では3地点ともにトーチャンが、30歳代以下ではオートーサンが聞かれました。符津町の20歳代以下の一部にパパも。つまり、市内の周辺地域に比べ、JR沿線の町部では新しい呼称がいち早く受け入れられていることが分かります。一方、現在の言い方では(20歳代以下では子どもの頃も現在もほとんど時間差がないので同じですが)、長田町の70歳代でオトンが聞かれた以外は60歳代から30歳代まででオヤジが聞かれました。成人後もトーチャンと呼ぶのには抵抗があり、オヤジと呼ぶようになったためと考えられます。

連載  
170小松方言の世代差 その29  
「あざができる」の世代差と  
場面差「いたーい! 転んじやったよ!」  
「おひざ、シンダね。大丈夫?」

今回は、JR北陸本線沿線世代別調査(グロットグラム調査)の結果から、長田町、本折町、符津町の「あざができる」(質問文は「足をぶつけたたりすると、そのあとが青黒くなって2〜3日消えないことがあります。どう言いますか?」)にあたる方言の世代差と場面差について見ることにします。場面差とは、①〈普段家で話す〉場合と②〈テレビに出て話す〉場合

合の違いです。

〈普段家で話す〉場面での「あざができる」

〈普段家で話す〉場面では、3地点とも30歳代以上でアザ・シナナル、アザ・シナナルが多く聞かれました。ただ、「あざ」にあたる名詞形がないシンダという言い方が長田町の50歳代と10歳代、本折町の70歳代、符津町の10歳代で聞かれました。シンダという形は、小松市だけでなく、福井県嶺北地方の一部(筆者も出身地である越前市の方言として使っていました)と石川県・富山県そして新潟県南部でも聞かれる形で、アザが体の一部をぶつけたりした場合にできる内出血による「あざ」と生まれつきの「あざ」の両方を指して使われるのに対して、シンダは内出血による「あざ」だけをさす方言形です。「皮下に血が染みる」の「染みる」の意の動詞シムが基本形と考えられますが、シムという形は聞かれず、シンダ(過去形)だけが使われます。

また、世代差で注目したいのが、本折町

の20歳代・10歳代で聞かれたアオタンガデキルです。「あざ」を指すアオタンは、北海道で新方言として生まれたものがまず東日本各地に広がり、首都圏や大阪でも使われ始めてから、そこを新たな発信地として全国に広がりつつある方言形であることが最近の研究から分かっています。ただ、北陸地方では、アオタンは10歳代よりも30歳代によく使われていることから一度は新方言として広がりかけたものが、共通語形アザにまたその座を奪われようとしているのかもしれない。

〈テレビで話す〉場面での「あざができる」

〈テレビに出て話す〉場面では、アオタンは聞かれず、3地点ともアザ・シナナルがアザガデキルが多く答えられています(長田町と符津町の10歳代ではシンダも)。アオタンは方言と意識されているためにテレビ場面で避けられたのに対し、シンダを答えた中学生はシンダを方言形とは思っていないのでしよう。

連載  
171小松方言の世代差 その30  
「びり」の方言の世代差

「ありやりや、ビリは誰?」

今回も、JR北陸本線沿線世代別調査の結果から、長田町、本折町、符津町の「びり」(質問文は「運動会の競争などで足が遅くて最後になること、あるいはそういう人のことを何だと言いますか?」)の方言形の世代差について見ることにします。〈普段家で話す〉場面での言い方の世代差です。

ところで、小松市内高年層の「びり」の

普段の場面での「びり」の方言形の世代差

伝統方言の分布については、すでに本連載20回目(1999年11月号)でご紹介したことがあります。「びり」が公然とは口ににくい隠語的性格を持つことから、1つの集落内で何種類もの方言形が使用されているという特徴が見られました。市内で聞かれた主な方言形はゲット類(ゲット・ゲットクソなど)、ゲベ類(ゲベ・ゲベタ・ゲベットなど)、ゲス類(ゲス・ゲスベ・ゲスツペなど)で、ゲベ、ゲットともに「尻」の意の方言形から、ゲスは「下衆(げず)」の意から生じたものだろうと書きました。そして、「最近ではビリと言う人が増えています。これらのうちのいくつかは、ビリとの併用という形で隠語的に使われていくかもしれません」とも書いたのですが、その世代的变化の様相を今回の調査結果から見てみたいと思います。

長田町では、70歳の男性でゲットが聞かれましたが、52歳・35歳・14歳の男性は

全てビリでした。本折町では、79歳男性でケツ、27歳女性でゲベが聞かれたものの、60歳男性・26歳女性・13歳女性はビリでした。そして符津町では、55歳男性でゲベタ、24歳女性と19歳女性でゲベが聞かれましたが、62歳男性と13歳女性はビリを答えています。

「びり」の方言形については、加賀地方のJR北陸本線沿線での調査結果から小松市以外の様子を見ると、最も年齢の高いところでゲット類がわずかに聞かれ(津幡、森本、美川、小舞子、明峰、動橋、加賀温泉、大聖寺の各駅周辺集落の70歳代が主に使用)、ゲベ類はそれよりも少し下の世代に広く聞かれています。このことから加賀地方では、小松でも長田町(明峰駅)の70歳で聞かれたゲットのほうが古い形で、本折町と符津町で聞かれたゲベタ、ゲベが次に使われ始めた形だと思われる。しかし、そのゲベ類も次第に使われなくなりつつあり、今や共通語形のビリが急速に勢力を拡大しているのです。

連載  
172

小松方言の世代差 その31  
「苦しくなった」の方言の世代差



「はいしょつと、あーエロナッタ」

今回は、これまでと同じく、JR北陸本線沿線世代別調査の結果から、長田町、本折町、符津町の「苦しくなった」調査での質問文は「4階まで階段を駆け上ったら苦しくなった」と言うとき、「苦しくなった」を何と言いますか?の方言形の世代差について見ることにします。

ちなみに、筆者はごつい場合、出身地の福井県越前市方言でエロナッタと言う

ていました。ただ、エロナッタという言い方は、他方言の人からは「偉くなった」の意味と誤解されやすい方言です。

中・高年齢層はエロナッタ、エレーナッタ

小松市内の3地点での調査結果を見ると、長田町の70歳代・50歳代でエレーナッタが、本折町の50歳代・30歳代でエロナッタが、そして符津町の70歳代でエロナッタが聞かれ、中・高年齢層での代表形がエロナッタ、エレーナッタであることが分かります。筆者が福井で使っていたエロナッタと同じような言い方です。

「疲れる、苦しい」などの意味でエライが使われる地域は、『日本文言大辞典』(小学館)によれば、北陸の石川・福井のほか、中部地方の長野・静岡・愛知・岐阜、そして近畿地方から中国・四国地方の広い範囲に及び、江戸時代初期の浄瑠璃作品の中にも用例が見られますから、本来、近畿地方で使われていたものが周辺地域に分布を広げたものと考えられます。

なお、長田町の30歳代、本折町の70歳代では、北加賀地方でよく使用されるヒド

ナッタも聞かれました。

青年層はシンドナッタ

中・高年齢層で多く聞かれたエロナッタ、エレーナッタに対して、本折町・符津町の30歳代(青年層)で聞かれた形がシンドナッタです。エロナッタ、エレーナッタより新しい言い方と考えられます。10歳代では、クルシクナッタ(本折町)、キツクナッタ(符津町)などが聞かれました。

シンドナッタのシンドイは、青年層の人たちが子どもの頃、つまり1980年代に起こった第一次漫才ブームに乗って、主にテレビを通じて全国に広がった「つらい」意味を表す関西方言形です。そして、シンドイは今では関西方言という意識が薄れ、共通語意識で使われている場合が多いようです。

連載  
173

小松方言の世代差 その32  
「玉蜀黍」の方言の世代差



「最近は一キビちゅう人、めつたにおらんよんなつたなあ」

本誌が皆さんのお手許に届く頃には、近くの畑に「玉蜀黍」が実っているのではないのでしょうか。今回はその「玉蜀黍」の方言の世代差、共通語化について見ることにします。

市内の「玉蜀黍」の伝統方言形の分布

小松市内での「玉蜀黍」の伝統方言形については、小松市立博物館の依頼で

1996年から2000年にかけて小松市内全域で行った調査結果をもとに、本連載の63回目(2003年6月号)「植物の方言あれこれその2」で次のように紹介しています。

『「かぼちゃ」と同じ渡来作物と言えは、『唐辛子』や『玉蜀黍』がありますが、南蛮渡来ということ(中略)、『玉蜀黍』にナンバキビの方言が聞かれます。『玉蜀黍』には、ほかにトーキビ、サトキビも聞かれました。トーキビは南の福井県嶺北地方から加賀地方に広く分布の見られるものです。』

つまり、小松市全体で見ると、「玉蜀黍」の伝統方言形の多数派はナンバキビ(「南蛮黍」が語源)であったことが分かっています。

JR沿線での「玉蜀黍」方言の共通語化

しかし、筆者たちが2008年にJR北陸本線沿線で行った世代別調査では、加賀地方の17駅周辺集落で高年齢層を中心にトーキビという形が聞かれるのみで、ナンバキビという形は全く聞かれませ

でした。小松市内ではナンバキビの方が古い形で、JR沿線ではそれよりも新しいトーキビに取って代わられたのでしょう。そして、そのトーキビは、北の津幡、寺井駅、南の動橋、大聖寺駅の駅周辺集落では70歳代以上(地点によっては60歳代以下でも)で何とか使用が確認できたものの、小松市内の3地点(長田町、本折町、符津町)では聞くことができませんでした。JR沿線地域では、トーキビが急速に衰退し、共通語化が進んでいることが分かりました。

ただ、共通語形「モロコシ」がマスメディアの影響や商品名などとして普及していることは同じはずなのに、私たちの調査では、富山西部では伝統方言形のトナワが30歳代あたりまで、南の福井県嶺北地方の武生以北でもトーキビが30歳代あたりまで根強く使用されていることがわかっています。「玉蜀黍」については、北陸の中核都市金沢を擁する加賀地方の共通語化が、富山や福井に比べて早く起こっていると考えればよいのでしょう。



連載 174  
小松方言の世代差 その33  
「麦粒腫」と「氷柱」の方言の世代差



「メモライって方言なんけ？」

「**麦粒腫**の方言は全世界でメモライ」  
小松市内の「**麦粒腫**」の方言分布については、本連載の8回目(1998年11月号)で取り上げましたが、ずいぶん時間が経ちましたので、今一度おさらいをしておきます。

市内の広い範囲に分布していたのが、メモライとその音変化形であるエモライ、イモライ、メモレ、メモロー、イモリなどでした。一方、大日川上流部の丸山にはホツテ、大杉谷川上流部にはメブツテ、ネブツテなど、埴田・古府・平面にはメチンボ類の分布が見られました。ホツテ、メブツテなどは、メモライよりも古い方言形「**目陪堂**」(「**陪堂**」は乞食の意の古語に由来します)。

2008年のJR北陸本線沿線での世代別調査結果に目を移すと、小松市内の3地点(長田町、本折町、符津町)では70歳代から10歳代までの全ての世代でメモライが聞かれました。「**麦粒腫**」では若い世代での共通語化(モノモライの侵入)が見られないのです。これは、共通語モノモラ

イの情報が少ないこと、メモライが福井県北部から石川県の加賀地方・口能登地方、そして富山県までの広い範囲に分布する地方共通語的存在であることが理由です。若い世代も含めて、メモライを方言だと気づかず、共通語だと思っている人が多いのです。

「**氷柱**の方言形タルキは死語化寸前」  
本連載では、22回目(2000年1月号)で「**氷柱**」の方言形を紹介したことがありますが、かつては、福井県嶺北地方から石川県にかけて、古語「**垂氷**」(平安時代の『源氏物語』などにも登場する)から変化したタルキが広く分布していました。しかし、2008年の世代別調査では、唯一、本折町の70歳代でタルキが聞かれたほかは、長田町、本折町、符津町とも全ての世代でツララが使われていました。共通語形ツララの急激な普及とともに、伝統方言形タルキは今や死語化寸前の状況であることが分かりました。

連載 175  
小松方言の世代差 その34  
「タイム」と「割り込み」の世代差



「あ、ちよつとタイム」  
「ダメ、この勝負、タンマなし」

これまでに取り上げてきた小松方言の世代差では、古くから小松で使われていたであろう伝統方言が若い世代に向かって衰退、あるいは変化している例が多かったのですが、今回は、2008年のJR北陸本線沿線での世代別調査結果から、「**タイム**」(質問は「遊びで鬼に追いかけて逃げているとき靴が脱げた」とします。そのとき「ちよつと待って」と頼むの

に何と言いましたか)と「**割り込み**」(質問は「電車やバスに乗るときなど、並んでいる列に横から入り込むする人がいますか」という、比較的新しく生まれたと思われる方言の世代差について見てみたいと思います)。

「**タイム**」の方言の世代差

共通語形はタイムと考えていいでしょう。小松市内の3地点(長田町、本折町、符津町)でも、10歳代では共通語形と考えられるタイムが答えられています。それより上の世代ではというと、本折町の60歳以上で「**チヨットマッテ**」のような言い方が聞かれたものの、3地点の20歳代から70歳代にかけてのほとんどの人がタンマを使っていることが分かりました。タンマは、そもそも関東地方で使われていた方言とされ、現在の共通語とされるタイムが変化した形との説が有力です。となると、10歳代で聞かれたタイムは最新の共通語形で、上の世代で聞かれたタンマはそれ以前に東京を含む関東地方の言

い方が伝わったと考えられます。

なお、関東方言のタンマに対して、関西地方ではある時期「**タイム**」にあたるミツキという言い方が生まれ、北陸を含む西日本各地に広がったとされています。筆者も子どもの頃、福井(越前市)でミツキを使っていました。しかし、今回の調査結果からは、ミツキは福井県嶺北地方の50歳代〜70歳代と富山県内の一部で使われたものの、加賀地方ではほとんど使われなかつたことが分かりました。

「**割り込み**」の方言の世代差

小松市内の3地点では4世代全ての人(ワリ)コミを使っていました(本折町の20歳代、30歳代では併用でジュンバンヌカシも)。そして、福井県の武生以北と富山県の広い範囲の50歳代以下では新しくヨコハイリが使われ始めていますが、加賀地方では、まだ金沢、野々市あたりでしか聞かれませんでした。